

# トマス・アクィナス『ヨハネ福音書講解』に おける神の世界内在について

保井亮人

## 序

私は本論において、トマスによる神の世界内在に関する議論を取り上げたい。その際主として参照されるのは、『ヨハネ福音書講解』(*Super Evangelium S. Ioannis Lectura*)<sup>1)</sup>133-135節における「(真の光は)世のうちにあった」(In mundo erat)に関するトマスの解釈である。Torrellによると、本著作は秘書レギナルドゥスによるトマスの講義録(reportatio)であり、その成立は第二回パリ大学教授時代(1268-72)のうちの1270-72年である<sup>2)</sup>。

この神の世界内在に関する議論は、『神学大全』第1部8問「神の事物における現実存在について」(De existentia dei in rebus)と直接対応している。しかしそれだけでなく、神そのものに関する議論(第1部3-11問)、神の知や意志に関する議論(第1部14-26問)とも密接に関わっている。したがって本論では、『ヨハネ福音書講解』133-135節の議論に即しながらも、適宜『神学大全』の上掲箇所を参考にすることで、神が世界に内在するということのより完全な理解を目指したい。

私が神の世界内在に関する議論において『ヨハネ福音書講解』を取り上げる理由は次のところにある。一般的にトマスは聖句の意味解釈において、それに関連する自らの思想を集約的な仕方ですべて述べている場合が多い。したがってその論述は、『神学大全』などの体系的著作で展開され

---

1) Thomas Aquinas, *Super Evangelium S. Ioannis Lectura*, Marietti, 1952 (以下、*Ioannis Lectura*と略記)。

2) Cf. J. P. Torrell, *Saint Thomas Aquinas*, vol. 1, Washington, D. C., 1996, pp. 198-201, 339; J. A. Weisheipl, *Friar Thomas D'Aquino*, Washington, D. C., 1983, pp. 246-247, 372.

る叙述に比べると、第一に簡潔にして本質的であり、第二にその表現において大胆なところがある。したがって私は本論において、『ヨハネ福音書講解』のテキストに依拠しつつ論を進め、それを『神学大全』によって補完することで、トマス自身の十全な考えを取り出せるのではないかと考えている。考察の手順は以下のとおりである。第一に世界における神の存在様態を規定し、第二にその創造の働きを説明し、第三に神の世界内在を確証する。

### 1 世界における神の存在様態

トマスは 133 節において、「あるものが世界のうちに存在する」というのに三つの仕方があるとする。一つ目は包含という仕方によってであり、ちょうど場所的なもの (*locatum*) が場所 (*locus*) において存在する場合である。たとえば「林檎が机の上に存在する」と言われる場合、場所的なものである林檎が机という場所に包含されてあるわけである。

二つ目は部分 (*pars*) が全体 (*totum*) のうちに存在する場合である。というのも世界の部分は、それが場所的なものでなくとも、世界のうちに存在すると言われるからである。天使などの超自然的実体 (*substantia supernaturalis*) は、質料を持たないがゆえに場所的には (*localiter*) 世界のうちに存在しないとしても、部分として (*ut pars*) は世界のうちに存在するとされる<sup>3)</sup>。「非物体的なものが場所のうちに存在するのは、物体のように次元的量の接触 (*contactus quantitatis dimensivae*) によるのではなく、力の接触 (*contactus virtutis*) による」<sup>4)</sup>。

トマスによると、真の光ないし神が世界のうちに存在するのはこれらいずれの仕方によるのでもない。神は場所的なもの (*localis*) ではなく、世界の一部 (*pars universi*) でもないからである<sup>5)</sup>。トマスにしたがえば、むしろ全世界 (*totum universum*) が神の部分であり、その善性を部分的に分有しているのである<sup>6)</sup>。「たとえ物体的なもの (*corporalia*) が何らかのものの中に包含されてあるといわれるにしても、霊的なもの

3) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 133.

4) *S. T.*, I, 8, 2, ad1.

5) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 133.

6) Cf. *ibid.*

の (spiritualia) はそれがそのうちにあるところのものを包含している。ちょうど靈魂が身体を包含しているように。それゆえ神もまた、事物のうちにそれらを包含するものとしてある (Deus est in rebus, sicut continens res)<sup>7)</sup>。『エレミヤ書』23章24節には次のように言われている。「私は天と地を満たす」(caelum et terram ego impleo)。トマスによると、真の光ないし神は第三の仕方、すなわち作出因かつ保持因 (causa efficiens et conservans) として世界に存在する。

## 2 創造の働き

以上の考察よりして、神が世界に内在するといわれるとき、それは万物の作出因かつ保持因としてであるということが明らかにされた。ではその働きとはいかなるものであるのか。まずトマスは133節において、万物に働きかけそれらを生ぜしめる御言 (Verbum) と他の働くもの (alia agentia) との差異を述べ、神の特異性を示す<sup>8)</sup>。他の働くものは外に存在するもの (extrinsecus existentia) として働く。すなわちそれらは、事物の外にあるもの (ea quae sunt extrinseca rei) に関して何らかの仕方ですべてを動かして変化させることによってのみ働くので、外的なものとして働くのである。たとえば足が球を蹴る場合などがそうであろう。これに対し神は創造する (creare) ことによって働くため、万物においてそのうちで働くもの (interius agens) として働く。以下がその理由である。すなわち創造するとは被造物に存在を与えること (dare esse) である。それゆえ存在 (esse) はいかなるものにとってもその最内奥 (intimus) にあるから、働くことによって存在を与える神は、その最内奥で働くものとして事物のうちで働くのである。この神の創造の働きをより精確に理解するため、『神学大全』第1部8問1項「神は万物のうちに存在するか」(Utrum Deus sit in omnibus rebus) を参照したい。

神は万物において、その本質の一部 (pars essentiae) としてでも

7) S. T., I, 8, 1, ad2.

8) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 133.

付帯性 (accidens) としてでもなく働くもの (agens) として、そこにおいて働きかけるものに臨在している (adesse)。というのもすべての働くものは、そこにおいて直接的に (immediate) 働きかけるものに結合されて (conjungi) いなければならず、その力によって (sua virtute) そのものに触れて (contingere) いなければならないからである。それゆえ、動かすものと動かされるものとは同時に存在 (simul esse) しなければならないと『自然学』第7巻において証明されているのである。しかるに神はその本質によって存在そのもの (ipsum esse per suam essentiam) であるから、ちょうど発火 (ignire) が火そのものの固有結果であるように、被造的存在 (esse creatum) は神の固有結果でなければならない。しかるに神は事物のうちにこの結果を、事物が最初に存在しはじめるときのみならず、存在において保たれているかぎり生ぜしめる。空気が照らされているかぎり、太陽によって光が空気の中に生ぜしめられているのと同様である。それゆえ事物が存在を有するかぎり、神はその事物が存在を有する仕方にしたがって (secundum modum quo esse habet)、その事物に臨在していなければならない。しかるに存在はいかなるものにとってもその最内奥 (intimus) にあるものである。というのも他の箇所ですべたことから明らかのように、存在は事物のうちにあるすべてのものに関して形相的なもの (formalis) だからである。それゆえ神は万物においてその最内奥に存在しなければならない (主文)。

以上の引用より以下のことが明らかとなる。神の万物のうちへの内在は、ある事物が神の本質の一部を有するようなものでも、ある事物の本質に関わらない付帯的なものとしてでもない<sup>9)</sup>。たとえば神は、私とその実体の一部を持つような、また私のある性質のようなものとして、私において存在するのではない。神は働くものとして、働きかけるものに直接結合しており<sup>10)</sup>、力によってそれに触れている。両者は同時に存在し、

9) Cf. S. T., I, 8, 2, ad3.

10) Cf. S. T., I, 8, 1, ad3.

それらを切り離して考えることはできない<sup>11)</sup>。しかるに神は存在そのものであり、被造的存在は神の固有結果である。それは発火が火そのものの固有結果であることとの類比によって感覚的に理解できる<sup>12)</sup>。さらに被造的存在を生ぜしめる存在そのものなる神の働きは、その事物が存在を有しているかぎり継続している。両者の結びつきは密接というより、むしろ神の存在は被造的存在にとって不可欠である<sup>13)</sup>。しかるに存在は事物のうちなるすべてのものにとって形相的なものであり<sup>14)</sup>、それゆえ事物の最内奥にあるものである。たとえば、私の靈魂は私の身体にとって形相的なものでありそれによって照らされるのであるが、私の存在は私の靈魂よりさらに形相的なものであり、私のすべてを現実化するものである。それゆえ私の存在は、私の最内奥よりして私を輝かしている光源として私のうちに内在する。この私の存在が、それを不可欠なものとして要求し、そこから私が私である力を得るところのものが神の存在である。それは最内奥より私が働き自存するとき<sup>15)</sup>、その根拠として常に働いている。私が存在するとき、必ず神の存在がそこになければならない。

### 3 神の世界内在

トマスは 134 節において、神の世界内在を三つの観点からさらに詳しく論じている。トマスによれば、神は力 (potentia)、現前 (praesentia)、本質 (essentia) によって万物のうちに存在する。このことを理解するためにまずは以下のことを知らなければならない。ある者は、その力に従属するすべてのものにおいて、「力によって」存在すると言われる。たとえば王は自らに従属する全王国において、その力によって存在している。またある者は、そのまなごしのうちにあるすべてのものにおいて、「現前によって」存在すると言われる。たとえば王は自らの家において、その現前によって存在している。さらにある者は、その実体

11) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 134.

12) Cf. *S. T.*, I, 3, 4, c.; *S. T.*, I, 14, 9, ad2.

13) Cf. *S. T.*, I, 7, 2, ad1.

14) Cf. *S. T.*, I, 4, 1, ad3; *S. T.*, I, 7, 1, c.

15) Cf. *S. T.*, I, 14, 2, ad1.

が存在するものにおいて、「本質によって」存在すると言われる。たとえば王は特定のある場所において、その本質によって存在している。

「力によって」神がいたるところに存在すると言われるのは、万物がその権能 (potestas) に従属しているからである<sup>16)</sup>。『詩篇』138 章 8 節には次のように言われている。「もし私が天に上ってもあなたはそこにおられる」(si ascendero in caelum, tu illic es)。この神の権能の絶対性を確認するため、ここで神の意志の確実性について述べられた箇所を引用したい。

それゆえ神の意志はもっとも強力 (efficassimus) であるから、神が生ずることを欲したものが生ずるのみならず、そのように生ずるよう神が欲したとおりに生ずるのである。しかるに神は、あるものは必然的に (necessario), あるものは偶然的に (contingenter) 生ずることを欲する。その結果全世界の完成のために (ad complementum universi), 事物のうちに秩序が立てられるのである<sup>17)</sup>。

神は自らが欲するものをみな成就するだけでなく、その仕方までも規定している。たとえば神は、世俗的価値の虜となっている極めて強欲な人間を、とある出来事を機に宗教的価値観へと転向させることができる。しかもそれを徐々に引き起こすか一度に引き起こすかもまた、すべて神の計画に基づいている。さらに物事が生ずる原因と結果の関係についても、神は自由にそれを規定できる。我々からして必然的と思われる出来事も偶然的と思われる出来事も、同じく永遠不変なる神の知にしたがって起こる。神は全世界の完全性を考慮した上で、すべてのものを支配的に統帥している<sup>18)</sup>。たとえば凄惨極まりない戦争にも幸福この上ない婚姻にも、劣悪な輩の愚行にも聖人君子の金言にも、全体の完成を慮る神の愛がその背後に隠されている<sup>19)</sup>。この神の愛を知る者のみが全世界の

16) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 134.

17) *S. T.*, I, 19, 8, c.

18) Cf. *S. T.*, I, 6, 1, ad2.

19) Cf. *S. T.*, I, 20, 3, ad1; *S. T.*, I, 11, 2, ad1.

意味を肯定することができる<sup>20)</sup>。むしろ神は御自身以外のものを、自らの善性ゆえにのみ欲するのである。

それゆえ、述べられたように、神は神以外のもの (*alia a se*) を神の善性という目的のためにのみ欲するので、神の善性以外の何かを神の意志を動かすということにはならない。ちょうど神は神の本質を知ることによって神以外のものを知るように、神の善性を欲することで神以外のものを欲するのである<sup>21)</sup>。

神以外のものとは被造世界全体であり、それを神は自らの善性を欲することで欲する<sup>22)</sup>。つまり被造世界は無限なる神の善性から生み出されるものであり、全世界は神の愛の結果である<sup>23)</sup>。

「現前によって」神が存在すると言われるのは、万物が神の目には露わ (*nudus et apertus*) だからである<sup>24)</sup>。この神のまなごしの現前性は、神の知の浸透性と深く関わっている。

しかるに示されたように、それによって神の知性が知性認識するところの神の本質 (*essentia divina*) は、存在するないし存在しうるすべてのものの十全な類似性 (*similitudo sufficiens*) である。それはすべてのものの共通なる原理 (*principia commnia*) に関するみならず、すべてのものの固有の原理 (*principia propria*) に関する類似性でもある<sup>25)</sup>。

神の知はこの被造世界に存在するすべてのものだけでなく、存在しうるすべてのものにも及ぶ広大なものである。特に存在しうるものに関する知はけっして通常の間人が有することのできないものであり、創造主と

20) Cf. *S. T.*, I, 4, 2, ad1; *S. T.*, I, 20, 2, c.

21) *S. T.*, I, 19, 2, ad2.

22) Cf. *S. T.*, I, 19, 3, c.

23) Cf. *S. T.*, I, 9, 1, c.

24) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 134.

25) *S. T.*, I, 14, 12, c.; *S. T.*, I, 14, 6, c.

しての偉大さを示すものである。さらに神の知は事物の共通的な部分だけでなく、その固有的な部分にも及ぶ繊細なものである。神は普遍的な「人間」のみならず、個別的な「この人間」をも知っているということであろう<sup>26)</sup>。すなわち聖書に言われているように、神は人の心や頭髮の数さえも見通しているのであり、このようなことは神が被造世界に浸透する霊であるがゆえに可能なことである<sup>27)</sup>。この霊なる神を知る者のみがすべてを正しく判断することができる。しかし聖霊そのものは誰からも裁かれることはない。聖霊はそれ自体によって自存しているからである<sup>28)</sup>。加えて神の現前性は、時間的制約を受けつけない永遠的なものである。

というのも、神の知性認識すなわちその存在は、継起なく存在しながら全時間を把握している永遠性によって測られるので、神の常なるまなざし (praesens intuitus Dei) は、全時間ないしあるときに存在したすべてのものに及ぶ。それらは現在の (praesentialiter) 神に従属しているのである<sup>29)</sup>。

神は時間のうちにはなく、過去現在未来を掌握する「永遠の今」において全被造物を直視している<sup>30)</sup>。われわれが事物を認識するのは時間のうちで継起的になされることであり、被造物を全体として同時にそして永遠の現在性において捉えることは、神的本性を分有する人間以外には不可能である<sup>31)</sup>。そのとき彼のうちに永遠性そのものが生じるのである<sup>32)</sup>。

「本質によって」神が存在すると言われるのは、その本質が万物にとって最内奥のものだからである<sup>33)</sup>。これについては2において詳しく述

26) Cf. S. T., I, 14, 11, c.

27) Cf. S. T., I, 8, 4, s. c.

28) Cf. S. T., I, 4, 2, c.

29) S. T., I, 14, 9, c.; S. T., I, 14, 13, c.; S. T., I, 14, 15, ad2.

30) Cf. S. T., I, 14, 7, c.

31) Cf. S. T., I, 10, 1, c.

32) Cf. S. T., I, 10, 2, ad1.

33) Cf. *Ioannis Lectura*, n. 134.



べたが、要点は以下のとおりである。存在そのものである神は万物の最内奥に存在する。それゆえ神は、通常の人間にはもっとも知られざるものであり、暗黙的なものとして受けとられている。しかし自らの魂を通じてその光源である神を知った者には、神はもっとも可知的であり、明示的なものとなる<sup>34)</sup>。「存在はすべての事物の現実性である」(esse est actualitas omnis rei)<sup>35)</sup>という命題の意味は、存在がすべての事物をその最内奥から照らし、現実世界に成立させている根拠であるというところにある。これは自らの存在を可能ならしめている存在そのものなる神を知ることではじめて開けてくる形而上学的洞察であり、神的本性を分有する人間に固有の世界観である<sup>36)</sup>。このような人間にとっては、神の存在がもっとも先なるもの、現実的なものである。そのかぎり以下のように言うのが適切である。神が万物のうちに潜んでいるというより、むしろ万物は神のうちに隠されている<sup>37)</sup>。

トマスは135節において、「あった」(erat)の解釈をおこなっている。

福音書記者ヨハネは、「世のうちにあった」と言う際、明瞭に「あった」と言うこの言葉を用いていることに注目すべきである。神は万物を生ぜしめ保ちながら、被造物のはじめより(ab initio creaturae)常に(semper)世界に存在した。というのももし神がその力(virtus)を一瞬でも被造物から引き抜いたとすれば、万物は無へと(in nihilum)戻され、存在することをやめるだろうからである<sup>38)</sup>。

ここでは、いま世界が存在するという事実から、神の世界内在が被造物のはじめよりする持続的なものであったことが示されている。さらにこの引用から、被造物の神への全面的依存の関係が理解される。被造物を

34) Cf. S. T., I, 5, 2, c.

35) Cf. S. T., I, 5, 1, c.

36) Cf. S. T., I, 8, 3, ad4.

37) Cf. S. T., I, 4, 2, c.; S. T., I, 18, 4, ad3.

38) *Ioannis Lectura*, n. 135.

無から存在へと引き出し保つのはただ神の力によるのであって、他の何ものにもよらない<sup>39)</sup>。いま世界が存在しているということは、その作出因かつ保持因としての神が働いているということである。神は万物の最内奥に存在しながら、存在の原因 (causa essendi)<sup>40)</sup>として被造世界全体を包んでいる。

被造物が神のうちに存在すると言われるのは二つの仕方による。一つは神の力 (virtus divina) によって包まれ保たれている (contineri et conservari) かぎりにおいてである。ちょうどわれわれの権能のうちにあるものがわれわれのうちに存在するというように。被造物はそれらが固有の本性において (in propriis naturis) 存在するかぎりにおいてもまた、神のうちに存在するといわれる。「われわれは神のうちに生き、動き、存在する」(In ipso vivimus, movemur et sumus) という使徒の言葉は、このような仕方では理解すべきである。というのもわれわれの存在も、われわれの生も、われわれの運動も神によって生ぜしめられる (causari a Deo) からである<sup>41)</sup>。

『ヘブライ人への手紙』1章3節には次のように言われている。「神はその力ある言葉によって万物を支えておられる」(portans omnia verbo virtutis suae)。ここで問題となるのは、一次原因としての神と二次原因としての被造的原因とがいかに関係しているかである。Rudi te Velde はトマスの創造論に関する論文において次のように述べているが、私もおおむね彼の見解に同意するものである。「神はある意味ですべてであり、すべてをなし、かつその際、他のものとのいかなる共働 (Konkurrenz) にも入らない原因である。神から神によって神において存在しないものは何もない……しかしトマスにとって一次原因の絶対性と包括性が意味するのは、それが唯一の原因であるということではなく、被造物がそれに対して本来的に無であり、何もできないということである。トマスの創造理解に特徴的なのは、神と被造物とが共働するという

39) Cf. S. T., I, 9, 2, c.

40) Cf. S. T., I, 8, 3, ad1.

41) S. T., I, 18, 4, ad1.

考えへのいかなる傾向性にも反対していることである……火そのものが熱するのではなく、火のうちにある神がそうするのである。自然の領域における神の働きは、神が自然（本性）の働きをいわば『引き受ける』（übernehmen）と言うように考えられてはならない。そうではなくまさに、神は事物に形相と力をあたえ事物をその働きへともたらすことで、自然（本性）をその固有の働きへと『確立する』（setzen）のである。まさしくここにおいて、創造主の存在の力（Seinsmacht）が示される。神が自然（本性）の働きのうちで働くのは、存在の超範疇的な原因として、自然（本性）におけるあらゆる範疇的形相と力をその内側から、『存在をもって』（mit dem Sein）伝える（vermitteln）ことである……存在はまさに二次原因のすべての働きにとって共通的なもの（das Gemeinsame）である」<sup>42)</sup>。神が被造物といかなる共働にも入らないということは、もちろん神と被造物とが無関係であるということではない。神は存在の原因としてあらゆる被造的存在を超越しながらも<sup>43)</sup>、事物に「存在」を与えることを通じて、すべての事物をその最内奥から照らし働かしめている<sup>44)</sup>。この存在贈与（dare esse）という神の働きによってはじめて、事物は自立的にそのすべての働きをなし、この世界における現実性を獲得する。万物はその最内奥よりして神のうちでのみ働くのであって、むしろそのときそれは神の働きの一部なのである<sup>45)</sup>。「普遍的原因は、そのもとにすべての個別的原因を含んでいる……〔すべての〕働きはいかなる仕方においても、普遍的原因の秩序を超え出ることはありえない」<sup>46)</sup>。トマスによれば、神の意志のほかには他の原因を求めることは無益なことではない。しかしもし他の原因を神の意志に依存しない一次的なものとして求めるならば、それは無益なことである<sup>47)</sup>。

42) Rudi te Velde, Schöpfung und Participation, in: Andreas Speer (Hrsg.), *Thomas von Aquin: Die Summa Theologiae*, Berlin 2005, S. 121f.

43) Cf. S. T., I, 3, 6, ad2.

44) Cf. S. T., I, 3, 8, s. c.

45) Cf. S. T., I, 4, 2, c.

46) S. T., I, 19, 6, c.

47) Cf. S. T., I, 19, 5, ad2; S. T., I, 47, 3, c.

## 結 語

以上、トマスによる「世のうちにあった」の解釈（133-135節）を適宜『神学大全』によって補完することで、神の世界内在についての十全な理解を目指してきた。第一に、世界における神の存在様態が考察され、場所的なものでも世界の一部でもない神は、万物の作出因ないし保持因として世界のうちに存在することが示された。

第二に、その働きすなわち神の創造行為が、まず万物の最内奥での存在贈与として捉えられ、次いでその構造が明らかにされた。存在そのものである神は、その実体そのものが私の存在に直接触れるような仕方です。私のうちにあり、私が最内奥より自ら働くとき、その根拠として必ず臨在している。神が被造物に自ら働く力を与えることは、あたかも火そのものが発火という固有結果を引き起こす働きのようなものとして比喩的に理解される。

第三に、神の世界内在がその力、現前、本質によるものとして詳しく説明された。万物が神の権能のうちにあるとは、万物が全世界の完成のために神の意志のままに生ずるということである。全世界の完全性は神の無限なる愛をその根拠としており、この愛なる神を知る者のみが、全世界を神に属するものとして捉えることができる。万物が神の目に露わであるとは、神の知が万物へ隈なく浸透しているということであり、それは存在しうるものや個別的なものにまで及ぶ。自存する聖霊のうちにある者のみが、過去現在未来を包括する「永遠の今」において万物を把握することができる。万物の最内奥に神が存在するとは、神が事物のうちにあるすべてのものにとって形相的なものだからである。万物は存在の現実態（*actus essendi*）<sup>48)</sup>である神によりその根底から照らされることで、自らの存在をこの世界のうちに自立させ、そのすべての働きをなすことができる。最内奥から自らのすべてを照らす光に包まれた者のみが以下のことを知る。万物は最高の現実性である存在そのもののうちに隠されている。

第四に、世界がいまも存在するという事実から、神の世界内在が被造

---

48) Cf. S. T., I, 3, 4, ad2.

物のはじめよりする持続的なものであったことが確認された。被造世界全体は神の力のうちに包まれ保たれているかぎりで存在し、神なくしてはただちに無へと戻される。この被造物の神への全面的依存の関係は、被造物からその自立性を奪うものではない。しかし「照明」や「確立」といった神の根源的な働きに関して、被造物はいかなる影響も及ぼすことはできない。神は万物の根拠だからである<sup>49)</sup>。『ロマ書』11章36節には次のように言われている。「神から、神によって、神のうちに万物は存在する」(ex ipso et per ipsum et in ipso omnia)。

#### テキスト

Thomas Aquinas, *Super Evangelium S. Joannis Lectura*, Marietti, 1952.

———, *Summa Theologiae*, Marietti, 1952ff.

*Die Deutsche Thomas-Ausgabe*, Salzburg 1933ff.

*Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, Stuttgart 1994.

#### 参考文献

Dauphinais, Michael, Levering, Matthew (ed.) : *Reading John with St. Thomas Aquinas*, Washington, D. C., 2005.

Domanyi, Thomas : *Der Roemerbriefkommentar des Thomas von Aquin*, Bern 1979.

Moling, Markus : *Zeit und Ewigkeit nach Thomas von Aquin*, Saarbruecken 2009.

Speer, Andreas (Hrsg.) : *Thomas von Aquin: Die Summa Theologiae*, Berlin 2005.

Torrell, J. P. : *Saint Thomas Aquinas*, vol. 1, Washington, D. C., 1996.

Weinandy, Thomas (ed.) : *Aquinas on Scripture*, London, 2005.

Weisheipl, J. A. : *Friar Thomas D'Aquino*, Washington, D. C., 1983.

———, Larcher, F. R. : *Commentary on the Gospel of St. John*, New York, 1980.

山田 晶『在りて在る者』創文社, 1979年.

———『トマス・アクィナスの〈エッセ〉研究』創文社, 1978年.

49) Cf. S. T., I, 4, 1, c.; S. T., I, 6, 2, c.